

一、次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

大人になったら、何になるの？

ガキのころ、大人たちにそう聞かれるたびに、俺は①岩のように黙ったものだ。俺は何かになるのだろうか。未来の自分を描けなくて、いよいよ俺が黙っていると、両親のどちらかが、言葉が出るのが遅い子でと、決まって言い訳するのが常だった。

そもそも俺は、子どものときから、「何か」になるなんて、一度たりとも考えたことはない。こういう言い方はA青臭いが、俺はいつも、俺であること以外に、めざすようなものは②カイクだったんだ。

鹿間四重奏団の第二バイオリニストとして、最後の日を迎えることになったこのときまで、ごく小さい内輪の声で言うが、俺は音楽を職業にしようなどとは一度も考えたことはない。音楽というものを、汚れた地上とは切れた特別なものと思っていたからではなく、いわゆる芸術と金が直結すると考えるほど、俺がおめでたくも単純でもなかったというだけの話だ。

こうして音楽で飯を食っている今、③俺は自分のことを詐欺師のように感じることもある。好きなことだけをして生きている。とりあえず、そう言っている④キョウグウだ。いいのだろうか。信じられない。誰に感謝したらよいのかわからなくて、神のようなものに⑤頭を垂れる。俺のどこかにごまかしはないか。ゆるみはないか。多分、ある。確実にある。そう思って、こぶしで胸のあたりをどしんと叩く。

俺のうちは貧しかった。おやじは代々続く、職工の家に生まれ、おやじ自身も、木材で建具を作る職工だったが、賃金に比して凝り性だったので、仕事の納期を守るために、徹夜もBいとわず働いていた。背中を丸め、いつも黙って木材を切ったり、削ったり、組み立てたり。今、歳を重ねたおやじの手は、若いころより一層ごつごつとして、関節のところが内側に曲がっている。古木の幹のようである。俺のつるりとした手とはまったく違う。それを見るたび、ますます俺は、自分のしていることに疑いを持つ。

かあちゃんは、長く宅配便を扱う会社の、経理事務をやっていた。細かい数字は肩が凝ると、いつもこぼしていたけれども、辞める時は、引き止められて大変だったそうだから、こちらにもまじめに勤め上げたのだろうと思う。

二人とも、今も山形の市内で元気に暮らしている。しょっちゅう膝だの腰だのが痛いと言いながら、なんとか倒れず生きているのは、一人息子の俺にとって、とりあえずはありがたい。働くということがどういふことか、俺はおやじとおふくろから教わった。

しかし彼らは、五十になったが独り身でこうして音楽に没頭している息子のことを、いったい、なんと思っているだろう。昔は俺の結婚について、あれこれ口にしたこともある。今はあきらめて、何も言わない。③親不孝だと思う。両親に言ったことはないが、俺はまともな結婚ができるような男ではないのだ。この先も、音楽とともに一人で生きていく。そうするより他はない。

子どもの頃、忙しい両親にかわって俺を育ててくれたのは、父方のばあちゃんだった。山形の農家の出身だったが、職人のじいちゃんといっしょになって、親父が言うに、二人はそりやあ仲おつまじく暮らしたらしい。そういう幸せは、俺とはまったく無縁だけれども、仲のいい夫婦というのは話を聞くだけでもいいものだ。じいちゃんが死んだあと、ばあちゃんは、息子夫婦、つまり俺の両親とそしてまだ小さかった俺と暮らし始めた。

放課後、友達と遊んだあとは、寝るまで、ばあちゃんと二人で過ごすことが多かった。ばあちゃんは目が悪く、そのせいもあって、うちにはテレビというものがなかった。あっても誰も、見る時間はなかったらう。

【I】学校では、同級生の話題の輪から、いつもはずれて寂しい思いもした。もともとアニメの主題歌や流行歌に関しては、一度聴けば、どんな曲もCたちどころに覚えられたので、元歌を知らなくても、口をあわせて歌うことができた。教えてくれたやつが間違っていたら、そのまま覚えてしまう難点はあったが、俺は声がよく――自分で言うのはDおこがましいが――音程もしっかりしていたので、しばしば人にほめられたし、学芸会ではスターだった。

歌を歌うことは今でも好きだ。カラオケへ行けば、演歌もJポップも、なんでも歌う。そんな俺を皆、あきれて見ている。他人のを聴くのも好きだ。歌はいい。声を出すと、身体の汚れが浄化される。

【II】音大にいるころも、器楽専攻と、歌を専攻しているやつらとでは、存在感に違いがあった。歌のやつらは、悪く言えばのんきだったし、特に女は能天気で派手だったが、みんな人がよく親切で、ストレスというものから解放された顔つきをしていた。

歌をやればよかった、と思うこともないではないが、歌の連中が、生来、持っている【④】のようなものが、俺には決定的に欠けている。俺は暗い。根のところが暗い。なんというか、俺がそのまま音楽にはなれない。俺の代わりに、バイオリンという、歌ってくれるヤツが必要だったのかもしれない。歌の連中は、音楽と自分のあいだに介在物がない。彼らは身体が楽器だから。【⑤】俺も生まれ変わったら、歌手になりたい。

テレビのないうちの当時の⑥ゴラクは、ラジオだった。ばあちゃんは、当初、歌謡曲と民謡以外には、興味のない人だったが、たまたまある日、ラジオを消し忘れ、そこから聞いたことのない曲が流れてきた。

クライスラーの「愛のよろこび」。ピアノとバイオリンの二重奏で、バイオリン名曲特集のなかの一曲だった。繰り返し湧き上がる甘いメロディーに、俺は新鮮な眩暈を覚えた。

⑥音楽のなかに「時間」が見えた。それは普段の時間のように、一直線上を進んでいくものでなく、同じところにおいて、噴水のように繰り返して、噴き上がっては落下する時間だ。メロディーは円を描きながら、回転し上昇し、そして天上に溶けて消える。波が浜辺を一掃するように、聴いたあとには何も残らない。しかし記憶のなかには時が流れ去ったという、切ない感触の跡が残る。

クラシックを聴いたのは初めてではなかった。学校では、音楽の授業のなかに、「レコード鑑賞」という、恐ろしく退屈な時間があった。俺にとっては、いや、ほとんどすべての生徒にとっては、ただ、いねむりする時間であった。交響曲などの大曲が多かったせいだろうか。

しかし、「愛のよろこび」によって、俺は初めてクラシックに開眼した。聞かせられるのと、自ら聴く——たまたま聞こえてきたものも含めて——のとは、なぜ、音楽がこうも違って聞こえるのだろう。

そしてそのとき俺のなかで、曲と同時に、バイオリンという楽器が、特別のものになったのだ。ピアノではなかった。どうしてもバイオリンだった。バイオリンの、甘く哀しみを引きずったような音色に、俺は魂をひき抜かれてしまったんだ。

子どものころから現在に至るまで、モノでも恋の相手でも、何かひとつを選ぶということのなかった俺が、生涯はつきりと選んだものがあるとすれば、それはただひとつ、あのときのクラシックであり、バイオリンだったと言えるだろう。

やがて聴くだけでなく、自分でもそれを弾きたくなった。弾いて歌って自ら楽しむ。それが俺と音楽の、あたり前で自然な関係になっていた。

《中略》

俺のように、始終弾くことが楽しいと公言し、練習を厭わないという人間も、嫌われ、変わり者扱いされ、^⑤ケイエンされた。オーケストラ時代の俺は、もっぱら「孤独な変人」扱いで、実際、そうなっていた。

もちろん自分では変わっているなんて、少しも考えたことはない。人から変わっている、変わっていると言われ続けるうち、それならば俺を貫いてやろうという、勇気だか意地だかが育っていった、それが今の俺を作った。

鹿間氏は、当時も今も、俺の精神的な兄貴である。いきなり訪ねて行った俺に、最初は驚き警戒もしたらしい。それでも演奏を聴いてくれて、最後はカルテットに来说と云ってくれた。うれしかった。まずは、身体を運んでみるものだ。そうしてぶつかってみるものである。

メンバーには、チェリストとして、伊井山耕太郎という紳士が既にいて、四重奏団を底から支えていた。すべての面でアグレッシブな鹿間氏と、ひだまりのような伊井山氏、そして、冷静な美女、片山遼子。

一番若い俺が入り、鹿間カルテットが現在の形を成したとき、「これからわたしたちをひっぱっていくのは、若いあなたよ、よろしくね」と、おどけるように言ったのは、その片山だった。

俺は真面目だから、若い自分に寄せられた期待を、任務とばかりに受け止め高揚したものだったが、実際、カルテットをひっぱってきたのは、もちろん俺ではなく鹿間氏である。

俺は常に、心に余分な思いをためないようにして、^①ソツチョコクであることを心がけた。周りは俺より数段力のある連中だ。かなうわけはなかった。ときには見当違いのことを言っ否定されもし、怒られたりもした。それでも俺がみんなから学ぶことのほうが多く、貧しいいいさかいは、一つもなかった。われわれは、なかなかバランスのとれた、いい四重奏団だったのではないか、と思う。私生活で、無関心を貫いたことも、俺の^②性分とはいえ、音楽をやるうえでは、不必要な問題をひきこまず、良かったと思う。俺はこのカルテットを大切に思うからこそ、音楽以外では、淡い交流を心がけた。

セカンドバイオリンという名称は、時々、二番手の、愛人の俗称のように言われることがある。^{【Ⅲ】}俺は密かに冷静な調整役だと自負している。外側に向かって我を張るといふことの少ない俺にとって、セカンドという位置は、ぴったりだったと、今更ながらに思うのである。

スターでありボスはあきらかに鹿間氏であり、彼の天性のあかるさ、あたたかみ、そしてきびしさ、圧倒的な存在感は、誰にもまねができるものではない。どこまでも自分本位を貫きながら、それでいて他人をさらっと気遣うことのできる、人間的な大きさがある。

俺は鹿間氏を敬愛している。^⑦その彼の傍らで、十五年。

四人の呼吸がびたと一致したとき、俺はぞっとして、鳥肌をたてたものだ。

そういうとき、羽がはえたように全身が軽くなり、俺の魂は天上へいく。比喻じゃない。ほんとうに俺自身が高いところへ上って、地上で弾いている俺自身を見下ろしているんだ。それはほとんど性的な快感に等しい。

二〇二五年度 樟蔭高等学校 入学試験 問題用紙 【国語】

二〇二五年二月十日 実施

解答は解答用紙の所定の欄に記入すること。

〔五枚のうち その三〕

伊井山氏が引退を口にしたとき、俺は⑧「静かな予感」がはっきりと形をとったことに、最初はむしろ安堵感を覚えた。けれど日がたつに連れて、さびしくなった。

鹿間氏はまだマグマを腹の底に持っている。彼は怪物だ。底が知れない。まだまだやれる。俺もそうだ。共にやりたい。まだ、もう少し。一方、伊井山氏のチェロは、もう数年前から、すりきれた音を響かせていた。そのことについては、もう言うまい。チェロ以前、伊井山さん本人に、危機が迫っているように俺には見える。

俺たち四人。かき鳴らしたのは、それぞれの楽器だが、俺はそれぞれの全身の骨を響かせあい、聴きあってきたのだと思っている。それでも現実には直視しなければならない。数ヶ月かけて、南から北へ、解散コンサートとして移動し続けたが、もうどのホールも、席がいっぱいになることはなかった。

今夜の、客の入りは一体、どうなることだろう。そして、俺の今後は。何も決まっていない。例によって、俺は何かが終わる前にその先を決めることができないでいる。

窓の外を見れば、雪が降っている。一瞬、ガキの頃と⑨錯覚する。ここは山形ではなく、東京である。長いあいだ、音楽をやってきたなあ。思わず生涯を振り返ったようになって、俺は恥ずかしくなり、ごつんと胸を叩く。すっかりしろよ。振り返るのは早い。

コンサートへ出かける前、いつもそうして、自分を鼓舞してきた。見送る家族もない俺の、出かける際の習慣だ。それも、いよいよ、今日で最後だ。

（小池昌代『弦と響』）

問一 傍線部⑧⑨の漢字はひらがなで、カタカナは漢字に直して答えよ。

問二 傍線部①「岩のように黙ったものだ。」と傍線部⑦「その彼の傍らで、十五年。」で用いられている表現技法は何か。最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 隠喩 イ 擬人法 ウ 倒置法 エ 体言止め オ 直喩

問三 傍線部②「俺は自分のことを詐欺師のように感じる」のはなぜか。最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア バイオリンという弦楽器だけを演奏することは、詐欺だとされているから。

イ 代々続く職工の家に生まれながら、おやじの跡を継がず、職工にならなかったから。

ウ 音楽で生活できるとは思っていないのに、音楽で飯を食っているから。

エ 誰に感謝したらよいのか分からず、神のようなものに感謝しているから。

問四 傍線部③「親不孝だと思う。」とあるが、それはなぜか。文中の言葉を使用し、二十字以内で答えよ。

問五 空欄【④】に当てはまるものを次から選び、記号で答えよ。

ア 品 イ 才能 ウ 華 エ 威厳 オ 偉才

問六 空欄【⑤】に入る一文はいずれか。最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア うらやましいと思う。 イ めんどくさいと思う。 ウ 控えめだと思う。 エ 騒がしいと思う。

問七 傍線部⑥「音楽のなかに『時間』が見えた。」とあるが、ここでの「時間」が意味するものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 学校での音楽の授業中の、恐ろしく退屈な「レコード鑑賞」という時間

イ 交響曲などの大曲は長すぎて、天上に溶けて消えるようにいねむりする時間

ウ 回転するレコード盤からクラシック音楽の記憶があふれ出る時間

エ 音楽を通じて芸術を体験した感覚だけが残る時間

問八 傍線部⑧「静かな予感」について、次の問いに答えよ。

(1) 「静かな予感」とは何か。文中の言葉を使用し、解答欄のことにばに続くように十字以内で答えよ。

(2) なぜ、「予感」がしたのか。文中の言葉を使用し、具体的に三十五字以内で答えよ。

二〇二五年度 樟蔭高等学校 入学試験 問題用紙 【国語】

二〇二五年二月十日 実施

解答は解答用紙の所定の欄に記入すること。

〔五枚のうち その四〕

問九 傍線部A、Dの意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- A 落ち着かせて イ 奮い立たせて ウ 深く考えず エ 慕わず オ 嫌がらず
カ すぐに キ 未熟な ク 身の程知らず ケ つまらない

問十 空欄【Ⅰ】、【Ⅱ】に入る語として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- A やがて イ ところで ウ そういえば エ つまり オ だから カ だが

二、次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

さる程に、春過ぎ夏たけ、秋も深く、冬のころにもなりしかば、日のうらうらなるとき、蟻穴よりはひ出で、餌食を乾しなす。
(春も過ぎ夏も過ぎ、秋も深まり、冬の季節になつて)

蟬来たつて蟻と申すは、「A あないみじの蟻殿や。かかる冬ざれまでも、① さやうにゆたかに餌食を持たせ給ふものかな。われにすこ

しの餌食をたび給へ」と申しければ、蟻答へて② いはく、「御辺は、春秋の営みには、B なに事をかし給ひけるぞ」といへば、蟬答へ

ていはく、「夏秋身の営みとは、木末にこたふばかりなり。その音曲に取り乱し、ひまなきままにくらし候ふ」といへば、蟻申し

けるは、「今とてもなど歌ひ給はぬぞ。③ 謡長じてはつひに舞とこそは承れ。C いやしき餌食をもとめて、何にかはし給ふべき」と

て、穴に入りぬ。
(入つた)

そのごとく、人の世にある事も、我が力におよばんほどは、たしかに世の事をも営むべし。ゆたかなる時、つづまやかにせざる人は、

貧しうして後、悔ゆるものなり。さかんなる時学せざれば、老いて後悔ゆるものなり。酔ひのうちに乱れぬれば、醒めての後悔ゆるも

のなり。④ 返々も是を思へ。
(学び盛りの時)

(『伊曾保物語』)

問一 傍線部①「さやうに」、②「いはく」を現代仮名遣いに直し、それぞれひらがなで答えよ。

問二 太線部A、Cの現代語訳として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えよ。

A あないみじの蟻殿や

A なんと立派な蟻さんなんだ

ウ 巢穴の準備は完璧ですか

B なに事をかし給ひけるぞ

A 何かお貸していましたか

ウ 何をしていらしたのですか

C いやしき餌食

A おいしそうな食糧

イ たくさんの食糧

ウ よくばりな食糧

エ 粗末な食糧

問三 傍線部①「謡長じてはつひに舞とこそは承れ」について、

(1) 文末が終止形でない形で終わっていることを説明した次の文の空欄ⅠⅡに入る語をそれぞれ答えよ。

文中に助詞の(Ⅰ)があり、(Ⅱ)の法則がはたらいっているため。

(2) この文は、「謡に深入りするついに舞い出すとも申します」と訳すが、この表現に込められた意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

A 芸事にふけると、深みにはまって止められなくなるものだ。

イ 芸事を磨くためには、違うことにも取り組んでみるべきだ。

ウ 芸事を極めるためには、たくさんのお金を払うことが必要だ。

エ 芸事に対する熱意は、三度の食事にまさるものである。

二〇二五年度 樟蔭高等学校 入学試験 問題用紙 【国語】

二〇二五年二月十日 実施

解答は解答用紙の所定の欄に記入すること。

〔五枚のうち その五〕

問四 傍線部②「返々も是を思へ」とあるが、この話で蟬はどうするべきだったのか。実際は何をしていたのかを踏まえて、解答欄のことに続くように三十五字以内で説明せよ。

問五 この話の主題としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 人に情けをかけてあげる優しさ イ 生活と芸事の両立の困難さ
ウ 身を削ってでも芸を磨く重要性 エ 将来を見据えて努力する必要性

問六 この作品は、外国のある作品をもとに江戸時代に書かれた仮名草子というジャンルの作品であるが、

(1) もとになった作品を次の中から選び、記号で答えよ。

- ア シートン動物記 イ アンデルセン童話 ウ イソップ物語 エ ファーブル昆虫記 オ グリム童話

(2) 次の中から江戸時代の文学者に当てはまらない人を一人選び、記号で答えよ。

- ア 松尾芭蕉 イ 近松門左衛門 ウ 井原西鶴 エ 与謝蕪村 オ 正岡子規

三. 次の各問いに答えよ。

問一 次の①～⑤の四字熟語について、

(1) それぞれの ☐ に入る同じ漢字を答えよ。

(2) その四字熟語の説明または意味を表しているものを【A群】の中から選び、それぞれ記号で答えよ。

- ① ☐ 体 ☐ 命 ② ☐ 思 ☐ 愛 ③ ☐ 画 ☐ 賛 ④ ☐ 信 ☐ 疑 ⑤ 以 ☐ 伝 ☐

【A群】 ア 信じられそうでもあるが、疑わしく思う気持ちもあって、どちらとも心の決まらない状態。

イ 心の内で思っていることが、声に出さなくても互いに理解しあえること。

ウ どうにも逃れようのない、差し迫った状態や立場にあること。

エ うろたえて、あっちへ行ったりこっちへ来たりすること。

オ 仲が睦まじく、互いに愛し合っていること。

カ 自分のした行為を自分で褒めること。

問二 次の⑥～⑩は日本の有名な書物の冒頭文である。(1) 書名を【B群】、(2) 作者名を【C群】の中から選び、それぞれ記号で答えよ。

⑥ 親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりしている。

⑦ 月日は百代の過客にして、行きかう年もまた旅人なり。

⑧ 春はあけぼの。

⑨ 天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと云へり。

⑩ 木曾路はすべて山の中である。

【B群】 ア 徒然草 イ 枕草子 ウ 源氏物語 エ おらが春 オ 奥のほそ道

カ 夜明け前 キ 吾輩は猫である ク 学問のすゝめ ケ 伊豆の踊子 コ 坊っちゃん

【C群】 サ 兼好法師 シ 森鷗外 ス 川端康成 セ 福沢諭吉 ソ 紫式部

タ 島崎藤村 チ 夏目漱石 ツ 松尾芭蕉 テ 清少納言 ト 小林一茶